

お月お星

昔、あつたずもな。

ある所に、お月にお星つて、とつても仲のいい姉妹、あつたつたずもな。

その家（え）にや、お月にや継母（こはら）が、お星にや本当の親（おや）だつたずども、オフグロあつたつたずもな。親父（おや）ア用（もち）たずに行つたあどだつたずが、その継母（こはら）ア、お月アえ（かわいらしくなかつた）えらすぐながつたずもな。そして、朝間（あさ）早く起きて、

「お月お星、起きろえー」

つてえば、

「ハアーイ」

つて、二人チヨロチヨロど起きて来たずもな。

それ見れば見る位（ぶん）に、継母（こはら）が、お月アええらすぐながつたずもな。まず、このお月（おつき）（なんどかしてしまいたい）あなたにがしてしめえてえど思つて、ある時（とき）、お月サ毒まんじゅうこし（こしらえて）やえで食（か）せる氣になつたずもな。

そして、お星サ、ある晩（ばん）、毒まんじゅうこしやえでがら、

「お星お星、今夜（こんや）、姉ツコサ毒まんじゅう食（か）せつがら、お前（めえ）、姉ツコのまんじゅうなど食（か）つてえなんねえぞ」

つて、言（い）つたずもな。そうしてえば、お星ア姉ツコサ、

「姉ツコ姉ツコ、今夜（こんや）、お母（お）けるまんじゅう食（か）うなよ」

つて、言（い）つたずもな。

「おれのをけ（く）つがら、おれのを食（か）えよ」

つて、姉ツコのもらつたまんじゅうば、食（か）せねえずもな。そして、お星のもらつたまんじゅう、食（か）せだずもな。

次（つぎ）の朝間（あさ）、その母（お）ア、お月アはあ死（し）んだもんだと思つて、知らねえふりして、

「お月お星、起きろやー」

つたずもな。そしてえば、まだ、

「ハアーイ」

つて、チヨロチヨロど二人、起きて来たずもな。その母（お）アたまげだずもな。毒まんじゅう食（か）つても、まず死（し）なねえなんてつて、思（おも）つたずもな。そして、今度（こんど）ア、梁（はり）がら槍（やり）で突（つ）く氣になつたずもな。そして、お星サ、

「お星お星、今夜（こんや）、姉ツコ梁（はり）がら槍（やり）で突（つ）くがら、お前（めえ）、姉ツコの側（わき）などサ寝（ね）ん

なよ」

「つて、言しよつたしよな。そしてええ、お星アまだ姉ねえッコサ、

「姉ねえッコ姉ねえッコ、今夜こんや、おれの寝とどつ所とどサ来て寝とどろよ」

「つて、言しよつたしよな。そして、

「姉ねえッコの寝とどつ所とどサば、俵たたら寝とどせでおげや」

「つて、そう言うがら、姉ねえッコア、われ寝とどつ所とどサば、俵たたら寝とどせで、布団とんかけで、そして、お星の寝とどつ所とどサ行とどつて寝とどだしよな。母ががア、梁はりがらお月つきめがげで、ブツツツブツツツと槍やりで突ついだしよな。

「あーあ、今度いまア死すんだもんだと思おもつて、次つぎの朝あさ間ま、まだ、

「お月お星、起おぎろやー」

「つたしよな。そうしてええ、まだ、

「ハアーイ」

「つて二人ふにんチヨロチヨロど来たきなしよな。母ががアたんまげだしよな。人ひとばがにわが（人を馬鹿にしたものだ）れだ。槍やりで突ついでも死すなねえと思おもつたしよな。

「こんなごどでえ、とつてもわがねえと思おもつて、今度いまア箱はこサ入れで、ずっと遠とほぐの山やまサ投なげるごどにしたしよな。そして、大工でえぐ頼たのんで、箱はここしえだしよな。

「そうしてええ、お星おせいア大工でえぐサ、

「箱はこの下したサ穴あなツコあげでけろ」

「つたしよな。そして、オフグロサ

「さあ、餅もちこしえでけろ。団子だんごこしえでけろ。豆煎まめいりつてけろ。米煎こめいりつてけろ」

「つて、お星の言いうごどでええなんでも聞きぐがら、こしえでもららつたしよな。

「そうして、姉ねえッコの箱はこサ入れだしよな。そして、姉ねえッコサ、

「姉ねえッコ姉ねえッコ、この下したに穴あなツコああつから。けしけしの種こぼ、姉ねえッコサ持もたせつから

「ごこの穴あなツコがら、けしけしの種こぼ一つひとつつ落おして行いげや」

「つて、言しよつたしよな。

「この花はなツコの咲さぐ時とき、おれおれアたねたねえで行いぐがらな。それまで生なぎでけろえ」
「つて、姉ねえッコサけしけしの種こぼツコ持もたせだしよな。そして、その姉ねえッコアはあ、箱はこサ詰つめられ、担かがれで山やまサつれで行いがれだしよな。そして、山やまサ土つち掘ほつて、箱はこサ入れられで、皆みな帰かつた来たきたしよな。

「次つぎの春はるサななつて、けしけしの花はなツコ咲さぐ時とき、お星おせいアたねたねえで行いつたしよな。

「ポツポツポツポツど、けしけしの花はな咲さえていいつから、それたねえで上あつて行いつたしよな。行くいくが行くいくが行いつてええ、けしけしの花はなツコアななくななつたしよな。

の左の目サ入り、お月の涙が右の目サ入つてえは、バツツリ親父の目ア開えだ
ずもな。そして、父娘三人、そごサ泊つてだつたずもな。

そしてだつたずが、親父ある時、火ほどサあだつていでえは、釜のふたな
がつたずもな。

「あや、釜のふたねえな」

つて、まがつて見でえは、親父その釜の中サ入つて、お日様になつたんだど。
お月ア、

「あや、父ア入つた」

つて、まがつて見でえは、お月も入つてしまつて、お月さんになつたんだど。
そして、お星が、

「あや、姉ッコも入つた」

つて、まがつて見でえは、お星も入つて、お星さんになつたんだど。

いじわるした継母ア、それこそ、もぐらもづになつて、一年いっぺんお土の中
にいねえはねえ人になつたんだど。お日様サあだれば死ぬ、もぐらもづになつ
てしまつたんだどサ。

どんどはれえ。

一度咲く野菊の

昔、あつたずもな。

ある所に、山のずつと奥にあばら家あつたつたずが、そこの家にとつても美
す娘あつたずもな。その娘、野菊す娘だつたずもな。

ある時、殿さま狩りに来て、家来といつて来て獲物とりしたずもな。
そして少ず疲れながら、一時休ませでもらんべど思つて、そのぶつかれ家サ入
つて見たずもな。そして、

「休ませでけろ」

つてば、中から爺さま出はつて来て、

「こんたなぶつかれ家だども休んでげ」

つて、言つたど。そして休んでいでは、中がら美す娘、お茶ッコ持つて出で来
たずもな。そのお茶ッコの出す作法のりつばなごど、なんともやれねがつたど。
その殿さまその娘ッコ見で一目ぼれしたずもな。なんとすてもその娘ッコ奥方
にすたぐなつて、なんと人頼んで人頼んで、爺さま、こんなな田舎者やつたつ